

# 研修トレーナーの1Patient体験記⑧

こんにちは。製薬企業向けのトレーニングを担当している、Nです。

「1Patient」を研修ツールとしてどのように有効活用するか、日々考えています。

1Patientは実際のカルテのデータを疾患別に検索できる興味深いツールです。

でも、カルテのデータは正直なところ、医師の書き方に個性があり、医師ご自身だけが理解できる書き方がされる場合も多く、難解です。

一方で、普段から、自社製品・競合製品にかかわる疾患分野の理解に努めているMRであれば、十分に理解できるものもあるはずですが、ただ、患者の皆さまにも、そのカルテにも日常的に触れていないので、少し敬遠する傾向にあることは事実だと思います。かく言う私も、MRになりたての頃は、患者の皆さまにお会いする機会がありましたが、月日が経つにつれ、規制なども相まって、外来を訪れることもできなくなり、距離ができていきました。

製薬会社の社員が患者の皆さんの生データに触れ、理解を深めることができれば、距離があったとしても貢献度をあげることができるのではないのでしょうか。

1Patientの記載事項には、日常活動の情報収集のヒントがたくさん含まれています。

検索画面では、特定の疾患名を選択して検索しますが、検索結果としてリストされた各症例には、検索した主病だけでなく、私たちが想定しておらず、教科書的に理解していない、合併する疾患名が多くリストされます。『基本情報』には合併する疾患名が、『医師所見』の項目からは私たちが聴き出さなければ到底得られない情報があります。

ということは、1Patientは、情報を聴き出す質問を想定するための情報の『宝庫』なのです。

例えば、統合失調症の症例を検索した際に、基本情報として消化器症状がある旨記載があれば「統合失調症の患者さんは消化器症状を合併されると聴いていますが、先生が診ている患者さんでは？」と質問にできます。その上で、医師所見で書かれている患者さんの身体的・精神的所見、生活状況などを参考に質問を作成します。もし、同様に統合失調症の所見に「過食」がみられれば「食欲などはいかがでしょう？」と、すこしばやかに伺うのもいいですね。

検索画面で、関連しそうな疾患を検索し、自社に関連した合併症を探り、それを話題にすることもできます。その他、特徴的な検査値なども、話題にできるのではないのでしょうか。

次回も引き続き1patientの記載内容から活用方法を探りたいと考えています。

## トレーナーNの略歴

『まもなく五十路を迎える男性トレーナー。製薬企業における人材育成・研修担当として20年以上、MRの育成にかかわる。MR・マネジャーの成長が何よりの喜び。』